

# 熊野がらきた巨木

## 円長寺のナギ

### 匠瑛探訪

— 50 —

巨樹・巨木(きよじゆ・きよぼく)の話題が取り上げられることが増えたような気がします。

平成20年発行の「千葉県の巨樹・巨木200選」では、県内を4つの地域に分け、それぞれの地域ごとに約50本ずつの巨樹・巨木が選ばれています。

香取・海匝・山武の県東地域の49本のうち、市内からは「安久山(あくやま・飯高地区)の大椎の木・スタジイ」、「飯高寺(はんこうじ・飯高地区)

のスギ」、「松山神社(匠瑛地区)大杉・スギ」、「生尾(おおいお)神社(匠瑛地区)大杉・スギ」、「野手円長寺(野田地区)の那樹・ナギ」、「川辺葉師寺(栄地区)の大楨・イヌマキ」の6本が選ばれました。巨樹・巨木は、一般に地面から1・3m地点の幹周(太さ)計測値が3m以上のものとされています。

県内の巨樹・巨木200選のうち、ナギは2本だけで、円長寺のものは山門(仁王門)から本堂へ向かう参道の

本州では山口県が北限とされ、四国・九州など暖地に多いとされます。記載内容で注目されるのが、「熊野権現の信仰と結びついて拡がり、神社によく植えられ…」というくだりです。

野田地区周辺は平安時代後期の1000年ころには、現在の和歌山県熊野三山の荘園(しょうえん)で「匠瑛南条荘」だったとされています。これらを少し無理して結びつけると、円長寺のナギは熊野の関係者によって植樹され、そこに寺が建てられたとも考えられますが、樹齢700年以上とされるナギの木だけがその由緒を知っているのかも知れません。

円長寺の山門の仁王尊には次のような伝説があります。昔、嵐が続き困り果てた村びとが神仏にお参りすると、風雨がおさまり、浜に2体の仁王様が流れ着きました。村びとに担がれ円長寺の前まで来ると、急に重くなったのでそこにまつられたいのだろうと山門を建てたといわれています。「海中出現の仁王尊」伝説も、紀州や関西圏との結びつきを思い起こさせます。

右手にあり、樹高9・5m、幹周4・9m、樹齢は700年以上といわれています。『木の百科 解説編』によると、ナギの名はその葉が万葉集にあるナギ、現在のミズアオイ科の葉に似ているからとの説があり、自然分布は

樹齢700年以上とされる円長寺のナギ

